図233　遺跡の位置
5万分1地形図「新潟」

下前川原遺跡　北区三ツ森川原

下前川原遺跡は、阿賀野川右岸、旧河道の自然堤防上にあり、現在は水田になっている。

遺跡は県営圃場整備事業に伴う事前調査で発見され、平成十四（二〇〇二）年・十五年に豊栄市教育委員会が一九〇〇平方メートルを発掘調査した。井戸一〇基、溝四二条などの遺構とともに、能登半島先端の珠洲で作られた珠洲焼や、遠く中国から輸入された青磁、白磁などの遺物が多数出土した。これらのことから、遺跡は川岸に営まれた中世の集落跡であることが明らかになった。

出土した遺物の時期は、十二世紀後半から十五世紀前半に及ぶが、主要な時期は十二世紀後半から十三世紀代である。遺物には、笹神丘陵（阿賀野市）近辺で生産されたとみられる陶器が若干含まれるほか、井戸跡からは丸木舟を転用した井戸枠や木簡一点が見つかった。木簡は、ほとんどの文字がかすれていたが、「十一日」「はかり（量り）」「いこかす（動かす）」などと解釈できる部分があり、日付を追って物資を量り、動かした記録木簡と推定されている。

出土遺物の特徴は、青磁の碗・皿を主とする中国産の陶磁器が一八一点と、比較的多いことである。青白磁の合子も六点認められる。しかし、城館などから出土する、青白磁の梅瓶のよ

うな威信財的な超高級品はなかった。

中世は商品流通が盛んになり、生産地から遠く離れた場所に製品が運ばれることが一般化する。下前川原遺跡から出土した遺物は、当時の物流の様子を反映したものといえる。また、遺跡周辺の地域は、近世以降に農地干拓のために阿賀野川や加治川が直接日本海に注ぐように開削されたが、それ以前は、加治川や新井郷川は松浜付近で阿賀野川に合流していた。下前川原遺跡の場所は、河川で福島潟や紫雲寺潟（しうんじがた）にも通じる内水面交通の要衝であったと考えられる。こうした立地条件や出土遺物の内容から見て、下前川原遺跡は、河川交通を利用した河岸（かし）的な集落であったと考えられる。近辺では、類似する時期の発掘調査例が少なく、沖積（ちゅうせき）地の中世集落の様子や物流の状況を知る上で重要な遺跡である。

図234　平成16年の調査区

図235　青磁・青白磁　左上,青磁皿　右下,青白磁の合子　他は青磁碗　皿の直径10センチメートル